藤原良経「西洞隠士百首」考

――四季歌の漢詩文摂取を中心に――

小山順子

はじめに

新古今時代の代表歌人である藤原良経は、建久年間、定家や家隆、寂蓮らを構成員とする九条家歌壇を率いた。九条家歌壇は、その後後鳥羽院歌壇の母胎となり、新古今風と呼ばれる表現を培う土壌となった。豊かな実りを生み出した九条家歌壇は、建久七年（一一九六）突如として活動を停止せざるを得なくなった。いわゆる建久の政変のためである。内大臣源通親の策謀により、良経の妹の任子は後鳥羽天皇の後宮を退出、父・兼実は関白を辞し、叔父・慈円は天台座主を辞した。良経自身は内大臣の任にとどまったものの蟄居の身となる。

建久の政変は、それまで順調に政治家として歩んできた良経にとって、初めての挫折であった。小稿で取り上げる「西洞隠士百首」（以下、本百首と略）が、政変によって蟄居していた最中に詠まれた百首歌であることは、既に久保田淳氏[1]によって指摘されている。更に寺田純子氏[2]・青木賢豪氏[3]は、建久九年（一一九八）五月二日成立の

『後京極殿御自歌合』（以下、自歌合と略）に、本百首から採られた歌が一首も見られないことから、自歌合成立後から正治元年（一一九九）六月に政界復帰するまでの間に、本百首の詠歌年次を推定した。

本百首に籠居中の良経の失意や隠逸志向が表れていることは、久保田氏を初め、寺田氏・片山享氏[4]・石川一氏[5]・岡部寛子氏[6]・内野静香氏[7]によって指摘されている。寺田氏・片山氏・岡部氏は、特に本百首の雑歌に、露わに述懐性や政治批判が表出しており、本百首の特色となっていることを指摘している。それでは本百首の大部分を占める四季歌には、どのような特徴が表れているのであろうか。久保田氏・石川氏は、『源氏物語』や源俊頼の表現を摂取した歌が見られることを指摘し、本百首の述懐性を分析している。小稿では、良経が和漢兼作歌人であるという点を重視し、四季歌を中心として、漢詩文摂取から本百首の解読を試み、表現を考察することを目的とする。なお本稿において、本歌取りの「本歌」に相当する用語として、踏まえられている漢詩文を「本文」と呼ぶこと、そして歌集を示さずに付す番号は、全て『秋篠月清集』の歌番号（新編国歌大観による）であることをお断りしておく。

一

本百首の四季歌の冒頭を見よう。

ふゆのゆめのおどろきはつるあけぼのにはるのうつゝのまづみゆるかな（600春）

この600番歌について久保田氏は、「『ふゆのゆめ』は何か（具体的に言えば建久の政変など）寓する所があるのではないかと思わせるような、おどろおどろしい歌い出しである」と述べている。通常、百首歌の巻頭は立春の喜び

を述べる。しかし良経の歌からは、春の訪れに対する喜びは読み取れない。内野氏はこの600番歌について、「冬の夢」が浅いまどろみの中で見ることの叶わぬ夢であり、それが覚め果て、現実を直視することになったという内容であると解釈する。和歌において「夢」と「現実」とは、「現実」に叶わぬものを「夢」に見るという構図が定型である。それゆえ、本百首においては、通常喜ばしいものであるはずの春の訪れは、浅いまどろみを覚ましてしまい、「現実」へと立ち返らせてしまう悲しいものとして詠み出されている。

一方、四季歌の最後、冬歌末尾に置かれているのは、次の一首をである。

まどのうちにあか月ちかきともし火のことしのかげはのこるともなし（679冬）

この歌に詠まれている〝窓の灯〟は、「五声宮漏初明後　一点窓灯欲レ滅時」（『和漢朗詠集』雑・暁419白居易）などに見られる詩語「窓灯」の訓読である。この詩句は、一晩中灯されていた灯火が、明け方に消え残っている様を詠んでいる。良経もこの詩句を意識して踏まえていると考えられるが、冬歌の末尾に置き、灯火の残り火に夜の終わりだけではなく、一年の終わりを重ねて詠んでいる。新年が来ると一歳年を重ねることになるため、灯火の衰微は生命の残り少なさを象徴するものでもある。直前の678番歌で「ひとゝせをながめはてつるやまのはにゆきゝえなばと花やまつらむ」と、春を待つ心、春への期待が詠まれているが、花が咲く季節、すなわち春の到来は年を重ねることになるため、残された命を減らしてゆくものとして、新春の訪れが喜ばしいものではないことを感じさせて四季歌は終わる。

なお本百首には、「窓」が三首に用いられている。良経の本百首以前に詠まれた定数歌を見渡して、「窓」の用例数は、「花月百首」「十題百首」「治承題百首」「南海漁夫百首」にそれぞれ一例ずつ見られる。それと比較して、本百首の三例は多いと言ってよく注目される。「窓」についてどのような素材であるかを確認し、本百首に「窓」が

三首詠まれている意味を検討する。

そもそも、「窓」は漢詩文から摂取された素材である。[8] 本百首以前に良経が詠んだ「窓」が、概ね漢詩文に基づいて詠まれているのを確認してみよう。

まどのゆきいけのこほりもきえずしてそでにしられぬはるのはつかぜ（401治承題百首・立春）

この歌は「窓の雪」「池の氷」という対句構成から、本文として踏まえているのは「池凍東頭風度解　窓梅北面雪封寒」（『和漢朗詠集』春・立春2篤茂）であると考えられる。「春の初風」も、本文の「東頭風度解」を翻案したものと解せる。詠歌年次未詳の「ゆきをつるおぼろ月よにまどをあけてころもでさむき春かぜぞふく」（1025春部・春歌とて）も同詩句を取ったものであり、「衣手寒き春風」は「風」「寒」の翻案と考えられる。なお〝窓の梅〟は、この朗詠詩句から摂取して、院政期から詠まれるようになった趣向であり、『為忠家初度百首』には「窓下梅」の題が設けられている。良経の「まどのうちにとき〳〵花のかほりきてにはのこずゑにかぜすさむなり」（19花月百首・花）は「花月百首」の詠であり、〝窓の梅〟のバリエーションとして、梅を桜に変えて詠んだものと考えられる。

次の歌は詠歌年次未詳であるが、漢詩取りの例である。

まどわたるよひのほたるもかげきえぬのきばにしろき月のはじめに（1096夏部・ほたる）

これは、「空夜窓閑蛍度後　深更軒白月明初」（『和漢朗詠集』夏・夏夜152白居易）を踏まえている。本文の詞を、ほとんどそのまま和歌に置き換えた歌である。またこれらの〝窓の雪〟〝窓の蛍〟には、本文の朗詠詩句だけではなく、『蒙求』の孫康・車胤の説話が背景に揺曳しており、学窓の性格を有していると思われる。

次の三首は、いずれも〝窓打つ雨〟を詠んだものである。

月きよみしぐれぬよはのねざめにもまどうつものはにはのまつかぜ（245十題百首・木部）
くらきよのまどうつあめにおどろけばのきばのまつに秋かぜぞふく（1229秋部・秋夜に）
くれたけはまどうつあめのこゑながらくもらぬ月のもりあかすかな（1189秋部・月照二窓竹一）

これらの歌に見られる「窓打つ（雨）」は、上陽人の「秋夜長　夜長無レ睡天不レ明　耿々残灯背レ壁影　蕭々暗雨打レ窓声」（『和漢朗詠集』秋・秋夜233白居易、『千載佳句』天象部・雨夜285）に基づく措辞である。[9] 良経も上陽人から摂取して孤独な心情を詠んでいると考えられるが、いずれも実際には降っていない雨を、木を吹く風の音に聞くという趣向[10]で詠んでいる。この趣向は特に珍しいものではないが、245番歌は特に「桂月清明　夏迎二一宵之秋一　松風蕭颯　晴聞二百尺之雨一」（『新撰朗詠集』夏・納涼152明衡）を合わせて取っていると考えられる。後に自歌合に採られた1229番歌もそのバリエーションであり、初句「暗き夜の」は上陽人の「暗雨」を詠み込んでいる。また1189番歌は、〝窓の竹〟という漢詩文に基づく趣向を合わせたものである。なお、良経が〝窓の竹〟を詠んだ歌に「まつにふくみやまのあらしいかならむたけうちそよぐまどのゆふぐれ」（532南海漁夫百首・秋）がある。〝窓の竹〟は、白居易が閑居の素材として繰り返し詠んでいる素材であり、[11] 白居易から影響を受け、日本漢詩に頻繁に詠まれるようになったと考えられる。532番・1189番歌は特定の本文に依ったものではないが、白居易から日本漢詩、そして和歌へという〝窓の竹〟の系譜上に立つ表現である。

〝窓の月〟は、良経の歌に三例が見られる。

ゆきをつるおぼろ月よにまどをあけてころもでさむき春かぜぞふく（1025春部・春歌とて）
くもらばとたのむゆめぢもわすられていくよのまどに月を見つらむ（1191秋部・連夜見レ月）
ものおもふちよをひとよもかぎりあれどまどよりにしに月はめぐりぬ（1231秋部・秋夜に）

いずれも詠歌年次未詳歌である。1025番歌については先に述べた。1191・1213番歌は、「夢路も忘られて」「物思ふ……窓より西に月は巡りぬ」と、眠れない夜を過ごして窓から傾いた月を眺める様を詠んでいる。〝窓の月〟は六朝詩においては孤閨の表現素材であり、唐詩では孤閨に限定されない孤独の情、日本漢詩では主に閑居や寺院から眺めるものとして詠まれる。本百首と同じ機会に詠まれた、慈円「四季雑各二十首都合百首」の「人はなし峯に松風窓に月しめえてすめる山のおく哉」（『拾玉集』3047雑）について、後に『慈鎮和尚御自歌合』八王子十二番左の俊成判詞に「左の、峯の松風、窓の月、山のおくのすみかこのもしくは侍を」と述べられていることからも、「窓の月」を山家を表現する題材として捉えていることが窺われる。また、同じく慈円の「つちかべにまどぬりのこすいほまでもすさめずやどる秋のよの月」（『拾玉集』2338賀茂百首・秋）は、窓を土壁の塗り残したものとして、粗末な庵を詠んでいる。こうした〝窓の月〟の表現は、慈円に限ったものではない。『正治初度百首』の四例（忠良・家隆・寂蓮・信広）は、全て「山家」の題で詠まれており、〝窓の月〟を、貴族の通常の住居空間である寝殿造においてながめるものではなく、山家から見るものとして表現している。これは新古今歌人に通底する理解であったと考えられ[12]、良経も、山家や閑居を舞台として、物思いに耽る様を詠んでいると解せる。

良経の「窓」の表現は、基本的に漢詩文に立脚したものであり、他の新古今歌人と同様に、隠棲者・思索家の住まいであることを示す表現素材として用いていると判断できる。

本百首の「窓」の用例を見てみよう。まずは、次の夏歌の一首である。

すがはらやふしみのくれのさびしきにたえずまどゝふほとゝぎすかな（624夏）

この〝窓の時鳥〟は、漢詩文に見いだせない趣向で、良経は慈円の「雲かかるまどの梢に雨おちて山郭公なきてすぐなり」（『拾玉集』1137勒句百首・夏）から摂取しているものと考えられる。但し、慈円の場合は〝窓の雨〟の

バリエーションとして詠んだものに時鳥を付け加えたものと考えられるが、良経は慈円歌から〝窓の時鳥〟を抽出して一首を詠み、新たな「窓」の表現を試みている。

なお「伏見の里」は、「いざこゝにわがよはへなんすがはらやふしみのさとのあれまくもをし」（『古今集』雑下981よみ人しらず、だいしらず）「菅原や伏見の里のあれしよりかよひし人の跡もたえにき」（『後撰集』恋四1024よみ人しらず、菅原のおほいまうちぎみの家に侍りける女にかよひ侍りけるをとこ、なかたえて又とひて侍りければ）などに見られるように、荒れて人も通わなくなった里という本意を有する歌枕である。詠歌主体が荒れた伏見里で独り暮らしているということを、「窓」は強調していると考えられる。

次の雑歌も漢詩文ではなく、先行する和歌から「窓」の表現を摂取している。

ふるさとにかよふゆめぢもありなましあらしのをとをまどにきかずは（689雑）

この679番歌について岡部氏が影響関係を指摘しているのは、西行の「昔見し宿の小松に年ふりて嵐の音を梢にぞ聞く」（『西行法師家集』552述懐の心を、『新古今集』雑中1679題しらず）である。西行からの影響は、それだけではなく〝窓の嵐〟にも認められる。〝窓の嵐〟は西行以前に先例が見いだせないが、西行には「あらしのみとき〳〵まどにおとづれてあけぬる空の名残をぞ思ふ」（『山家集』915閑中暁）「谷風はとををふきあけているものをなにとあらしのまどたゝくらん」（『山家集』966題しらず、『西行法師家集』584）「まぎれつるまどのあらしの声とめてふくるをつぐる水の音かな」（『山家集』1049深夜水声と云事を、高野にて人〳〵よみけるに）の三例が見られる。

先に、「窓」はそのほとんどが、漢詩に基づく表現の一部として詠まれていたことを述べた。しかし、西行の「窓」の表現はやや傾向が異なる。西行が詠んだ「窓」の歌は、他に〝窓の霰〟（『山家集』963）〝窓の入り日〟（同1153）〝窓の櫨〟（同1200）〝窓の竹〟（同1428）がある。〝窓の竹〟は漢詩文的な発想であるが、その他は〝窓の嵐〟も含

めて、ほとんどが平安時代の「窓」の表現類型の中に収まりきらないものである。西行が他の歌人よりも自由に〝窓〟を詠んでいるのは、題詠中心に和歌が詠まれた院政期にあって、率直に自身の心情を和歌に表した西行の自由自在な個性の一つの現れと見ることもできる。小田剛氏[13]は、西行が詠んだ〝窓〟は自己の山家、住まいの一部を詠んだものであると述べている。これは、僧侶である西行の生活の場が草庵や寺院であり、壁および〝窓〟は、日常生活の中で目にする馴染みのあるものであったために、西行が詠んだ〝窓〟は、漢詩文から摂取した素材というよりも、自身の僧侶生活から獲得したものである側面が強く作用したと考えられる。

「マド」は『倭名類聚抄』に「牖　説文云一（反切略）和名末度（中略）在レ墻曰レ牖、兼名苑云一名櫳」とあり、牖が屋外の垣に、窓が屋内の壁に設けられたものであるという違いはあるが、いずれも「穿レ壁以レ木為二交窓一也」と、壁に穴を開けて木を渡した連子窓を指している。「櫺子」の項に、「窓櫺子也。（反切略）欄檻及窓間子也」とあるのにも対応しており、建築史においても、山田寺や法隆寺に連子窓が用いられていたことが知られている。[14]白壁は大陸文化の影響を濃く受けた寺院から用いられたものであり、粗末な土壁が庵に用いられるものであったという違いはあるが、いずれにせよ貴族の通常の住居である寝殿造には壁がほとんどない[15]ため、寺院や山家が「壁」及び「窓」の在る空間として特に意識されたのであると考えられる。建築物の開口部として「窓」を位置づけるならば、寝殿造の蔀・半蔀・格子も「窓」に該当する。[16]しかし、「窓」が和歌で詠まれる時は、概ね山家や草庵、僧院の連子窓が想定されている。[17]これは、先に述べたように、白居易が閑適生活を詠んだ詩で〝窓の竹〟を好んで繰り返し詠じていることも、閑居に付随するものとして窓を意識した一因であると考えられる。また小田氏は、貴族歌人は漢詩文から、隠遁歌人は自己が住む家の一部として「窓」を表現しており、捉え方が異なると述べている。しかし、漢詩文からの摂取に基

づくものであるにせよ、自己が住まう住居の一部としてであるにせよ、それが「窓」の詞で表現される限り、「窓」とは隠逸的空間を表す詞である。それゆえ、本百首で詠じられた三首の「窓」は、閑居に住む立場から詠んだものであることを表象している。また、「軒」（626）「軒端」（649・673）も、「窓」と同様に山家・閑居、すなわち脱俗的空間を舞台としていることを表す題材である。[18]

更に、「窓」が表す心情表現の性質を検討しよう。住居にまつわる題材は、屋内から屋外を見やる詠歌主体の視点を提示することを、岩松研吉郎氏[19]が指摘している。川平ひとし氏[20]は、それに加え、住居系の歌語及び空間を表象する歌語に「1、都の俗塵を遠く離れた空間へ遠心的に向かうヴェクトル」「2、他者から切離された、ひとりの内密な空間へ求心的に収斂しようとするヴェクトル」、すなわち〈草庵的〉〈隠者的〉な徴しを認めている。また川平氏は、和歌において詠まれる建物は、広大な外観ではなく、建物の末端部ないしは縁辺部に限られ、あくまでもすみかの内部に身を置く立場で花鳥風月が詠まれていることにも注意を喚起している。川平氏の指摘は、「窓」において顕著に認めることができる。すなわち、壁に囲まれた空間とは俗塵から遮断された脱俗的空間である。[21]そのような隠逸的家屋へと向かう詠歌主体の心の有りようと、閉鎖的空間の中で自らの内奥と向かい合う心が表出しているのである。そこに詠まれた「窓」とは、外界から閉ざされた草庵的・隠者的空間に身を置きながら、むしろ身を置くことで、詠歌主体に外界の自然景物を一層鋭く知覚させる役割を担っていると考えられる。それゆえ、「窓」にまつわる景物は、基本的に屋外に在るか、屋外から屋内へと入り来るものである。梅・竹・雨・月、全てしかりである。また、「窓」が詠まれる際、時間帯は夕方から明け方まで、つまり夜に設定されていることにも注目される。思索に耽る「窓」のある空間には、夜が相応しいのである。本百首に見られる「窓」の多用は、良経が籠居中という状況を隠棲と見なし、その中で自らの内面と向き合う姿勢を表象していると考えられる。

このような「窓」の表現を踏まえて、もう一度、冬歌二十首目を顧みてみよう。

まどのうちにあか月ちかきともし火のことしのかげはのこるともなし（679冬）

他の景物が、窓という媒介を通して屋外から詠歌主体に感得されるものであるのに対して、〝窓の灯〟はあくまでも屋内に置かれたものであり、外の世界との接点がある空間でありながらも、視線は屋内にとどまっていることを示している。残された夜の時間と生命の象徴である灯火は、隠遁的空間を象徴する「窓」の辺に置かれている。〝窓の灯〟を詠んだ和歌は、この679番歌が『新編国歌大観』の範囲で初見である。〝窓の灯〟は後に、嘉禄元年（一二二五）四月に道助法親王が主催した『詠十首和歌』で題に採用されており、承久二年（一二二〇）『道助法親王家五十首』の「閑中灯」題でも二十二人中十三人の歌人が〝窓の灯〟を詠んでいる。赤羽淑氏[22]は、「窓灯」という漢詩文から摂取した題材が、凝縮した文学空間を和歌にもたらしたと述べている。この〝窓の灯〟に良経が着目したのは、和漢に通じた歌人として、新たな「窓」の表現を模索したのであり、また〝窓の灯〟が良経の心情や状況を象徴する題材として適していたのであろう。

なお、679番歌の前歌は「ひとゝせをながめはてつるやまのはにゆきゝえなばと花やまつらむ」（678冬）と、上句で山の端を眺め続けて一年が過ぎ去ってしまったと詠んでいる。四季の変化を山家・閑居から感得したこと、すなわち政変後の籠居生活を、山家・閑居生活と見なして表現していることがここからも窺われる。そして679番で屋内へと視点が向かう。はかない「冬の夢」が春の訪れによって覚まされ、現実へと立ち返らされたと詠み出された本百首の四季歌は、俗世から離れた閑居の中で、灯火の衰微に自らの命運を重ねるかのように、詠歌主体の内面へと向かう視点で結ばれるのである。

二

本百首が山家や閑居に隠棲する視点から詠まれていることを、前節で見てきた。次に、良経の心情表現について詳しく検討しよう。

本百首の表現を考察する際に、特徴的な歌として必ず取り上げられてきた歌がある。

秋かぜのむらさきくだくゝさむらにときうしなへるそでぞつゆけき（646秋）

この歌の第四句「時失へる」は、『源氏物語』須磨巻で光源氏が詠じた「いつかまた春のみやこの花を見ん時うしなへる山がつにして」を摂取したものであることが注目されている。「時失へる」とは、時流から見放された我が身の表現であると同時に、光源氏の失意に重ねられているのである。

この歌が有する失意表現とは「時失へる」によって明らかなのではあるが、この句以外の表現についても見てみよう。まず、第二句の「紫くだく」とは「蘭薫苑嵐摧レ紫後、蓬莱洞月照レ霜中」（『和漢朗詠集』秋・菊271菅原文時）から摂取したものである。すなわち、藤袴が風に吹かれて散らされる様を「紫くだく」と表現している。詞はこの「蘭薫苑嵐摧レ紫後」から摂取したものであるが、上句全体が踏まえているのは、秋風が叢の蘭を散らすという趣向から、次の章句の後半部であると考えられる。

扶桑豈無レ影乎　浮雲掩而忽昏
叢蘭豈不レ馥乎　秋風吹而先敗（『和漢朗詠集』秋・蘭287中書王）

この章句の原拠は、『本朝文粋』（巻一賦）所収の兼明親王作「兎裘賦」である。序文に「為二執政者一、枉被レ陥矣」とあるように、執政者すなわち藤原兼通に陥れられて西山に隠棲することになった怒りを陳べた賦である。

この句は、「文子曰、日月欲レ明、浮雲蓋レ之。叢蘭欲レ修、秋風敗レ之。」（『藝文類聚』歳時部上・秋、同薬草部上・蘭、『初学記』宝器部花草附・蘭）や「日月欲レ明、而浮雲蓋レ之。蘭芷欲レ脩、而秋風敗レ之。」（『准南子』説林訓）を踏まえていると考えられる。また、正安本『和漢朗詠集』の裏書には、『文子』の章句と『貞観政要』巻六杜讒邪第二三の「叢蘭欲レ茂、秋風敗レ之。王者欲レ明、讒人蔽レ之。」が記されている。なお、『古事談』第一「道長破二一条天皇御手習反古一事」には、一条天皇の崩御後、手箱の反古に「叢蘭欲レ茂秋風吹破、王事欲レ章讒臣乱レ国」とあったのを道長が見て、自分のことと思い破り捨てたという記事がある。『貞観政要』及びそれを踏まえた一条天皇の反古は、「蘭」が帝王を象徴しているが、『文選』巻三二・『楚辞』所収の「離騒」では、蘭が高潔な人格を持つ忠臣の象徴として用いられており、以降の漢詩文における用例も忠臣を意味するものが多い。蘭が表すのは、帝王そのものを指すというよりも、正しい政治を行おうとする身を表すと考えられる。良経歌においても蘭は忠臣である自身の比喩であると解せる。蘭が秋風によって「摧」かれるとは、忠臣・賢臣が讒臣によって挫折させられることを象徴することを、趙力偉氏[23]が俊成の「ふぢばかまあらしたちぬる色よりもくだけてものは我ぞかなしき」（『長秋詠藻』143述懐百首・秋・蘭）について指摘している。良経の646番歌も俊成歌から影響を受けているとも考えられる。第五句「袖ぞ露けき」は「風がふけばまづやぶれぬるくさのはによそふるからにそでぞつゆけき」（『後拾遺集』釈教1189公任、維摩経十喩のなかに此身芭蕉のごとしといふ心を）が風に破れ（砕け）た草を我が身によそえるという趣向も一致しており、ここから摂取したものと考えられる。なお、後述するように、本百首には良経自身を屈原に重ね合わせた歌が見られるが、646番歌も「離騒」第八段の「曽歔欷余鬱邑兮、哀二朕時之不一レ当。攬二茹蕙一以掩レ涕兮、霑二余襟一之浪浪。」は、「時の当たらざる」「余が襟を霑して」の表現が、646番歌の「時失へる」「袖ぞ露けき」に近似しており、影響があると思われる。

すなわち、この646番歌で詠まれているのは、表面上は、秋風によって吹き散らされる蘭の叢に、失脚した私の袖は、蘭に置く露のような涙で濡れている、の意であるが、そこに含まれているのは、讒臣のために忠臣である自身が不遇の状態に置かれているという嘆きであると考えられる。「時失へる」という失意表現のみではなく、それが讒臣の奸佞によって忠臣である自らが陥れられた結果であることを、蘭と秋風の象徴的意味を用い、一読すると叙景である上句によって表現したのである。一首を蘭と秋風の寓するところを踏まえて読むと、「時失へる」という光源氏に重ねられた不遇意識を述べた句のみではなく、上句にも、叙景に暗喩された怒りや失意、政治批判を読みとることができる。良経は漢詩取り技法を用いることで、叙景に現在の状況を生んだ理由を象徴させているのである。

646番歌と対をなすかのような歌が、次の歌である。

てらす日をゝほへるくものくらきこそうきみにはれぬしぐれなりけれ（666冬）

この歌は、先掲の章句の前半部を踏まえて詠まれたものである。

扶桑豈無レ影乎　浮雲掩而忽昏

叢蘭豈不レ馥乎　秋風吹而先敗（『和漢朗詠集』秋・蘭287）

後半部を踏まえた646番歌は、蘭が忠臣を、秋風が讒臣を象徴することを先に述べた。「扶桑」は太陽のことであり、「太陽―浮雲」と「蘭―秋風」を対句で用いるのは、先掲の「文子曰、日月欲レ明、浮雲蓋レ之。蘭叢脩レ発、秋風敗レ之。」（『藝文類聚』歳事部・秋、同薬草部上・蘭、『初学記』宝器部花草附・蘭）「日月欲レ明、而浮雲蓋レ之。蘭芷欲レ脩、而秋風敗レ之。」（『准南子』説林訓）においても同様に認められる表現である。

また、この〝浮雲が太陽を覆う〟という表現は、次の詩にも見られるものである。

行行重行行、与レ君生別離。相去万余里、各在二天一涯一。道路阻且長、会面安可レ知。胡馬依二北風一、越鳥巣二南枝一。相去日已遠、衣帯日已緩。浮雲蔽二白日一、遊子不二顧反一。思レ君令二人老一、歳月忽已晩。弃捐勿二復道一、努力加二餐飯一。

（『文選』巻二九雑詩上「古詩十九首」一、『玉台新詠』巻一「雑詩九首」三・枚乗、『藝文類聚』人部十三・別上）

この詩は、遠行の夫を思い遣る妻の詩である。それゆえ、傍線部も夫と隔てられている妻の悲しみと現代では解釈されている。しかし中国の古注では、この詩を讒言にあって国を追われた忠臣の情を陳べたものとし、傍線部も李善注は「白日」を忠臣、「浮雲」を讒臣の象徴と解する。但し五臣注の劉良は、「白日」を君主の、「浮雲」を讒臣の比喩と解している。[24] 兼明親王の章句について、『和漢朗詠集』の古注にもこの『文選』詩句が引用されているが、院政期に成立した『和漢朗詠集私注』では、李善注を引用しながらも「白日」の解釈について二説を並記している。この頃既に、『文選』詩句および『和漢朗詠集』章句の解釈が揺れていたことを示しており、そのため、良経がいずれの解を取っていたのか不明である。ここでは、『和漢朗詠集新釋』（金子元臣校注）、新潮日本古典集成『和漢朗詠集』（大曽根章介校注）、小学館新日本古典文学全集『和漢朗詠集』（菅野禮行校注）が解釈するように、「白日」を君主の喩と取り、上句「照らす日をおほへる雲の暗き」とは、後鳥羽院の英明を讒臣・通親の奸佞が曇らせている状況を指していると解しておく。下句の「憂き身に晴れぬ時雨」―我が憂き身の流す涙は、上句が象徴する失政のためであると、現在の状況を生んだ理由を示して646番歌と同様の嘆きを詠んでいるのである。

この二首は、一読すると叙景に見える表現の背後に、象徴的意味を内包している。その象徴的意味とは、忠臣である我が身が、讒臣（直接には通親）によって政治から遠ざけられているということである。良経が自身の心情を

漢詩取りを用いて叙景に託す形を取り、直截的な表現を取らなかったのは、露わな形での批判が危険であると考えたことが一因としてあげられる。九条家の人々を退任・籠居へと追いやった通親に対する批判は、通親にとどまらず、その讒言を入れた後鳥羽院の失政への批判にもつながるからである。しかしそれだけではなく、叙景の中に政治批判をこめる、すなわち漢詩で比興に該当する和歌を試みているのではないかと考えられる。単に「時失へる」―失脚したということを詠出しているだけではなく、それが讒臣（通親）に陥れられた結果であること、良経自身はあくまでも忠臣であるということを叙景の象徴性を用いて表現しようとしているのである。雑歌の「くもりなきほしのひかりをあふぎてもあやまたぬみをなぞうたがふ」（692）は、直截的に嘆きを表白し、自らの潔白を訴える。四季歌では、この嘆きの原因を通親が作ったことを叙景に託して表現しているのである。

その後、本百首から『新古今集』には一首も採られておらず、良経自身が、本百首を撰集資料として提出しなかったと推測できる。久保田氏は、これは後鳥羽院に対する配慮からであり、また政界に復帰し摂政太政大臣を務める良経本人の古傷に触れることになるからであると指摘している。但し後鳥羽院だけではなく、通親に対する配慮も含まれていると考えられる。『新古今集』撰進時代、通親は和歌所の寄人であり、更には『新古今集』撰者の一人の通具は通親の息子であったから、讒臣として通親が糾弾の対象となっている本百首は、用いることを避けられたと考えられるのである。

三

次の一首も、やはり叙景の中に寓意があると解せる歌である。

なつふかみいりえのはちすさきにけりなみにうたひてすぐるふな人（633夏）

舟人が歌を歌う姿は、漢詩文では「棹歌」「櫂歌」などの熟語があり、よく見られるものである。但し「波に歌ひて過ぐる」という詞から、この歌の下句は、屈原の「漁父辞」を踏まえていると考えられる。

追放された屈原は、湘江のほとりで漁父に会う。自らの清廉のために放逐されたと語る屈原に、漁父は、衆人と同様に濁りに任せればよいと説く。

屈原曰、吾聞レ之。新沐者必弾レ冠、新浴者必振レ衣。安能以二身之察察一、受二物之汶汶者一乎。寧赴二湘流一、葬二於江魚腹中一、安能以二皓皓之白一、蒙二世俗之塵埃一乎。漁父莞爾而笑、鼓レ枻而去。乃歌曰、滄浪之水清兮、可三以濯二我纓一、滄浪之水濁兮、可三以濯二我足一。遂去、不二復与一レ言。

（『文選』巻三三騒下・屈原「漁父」、『楚辞』「漁父」）

たとえ死んだとしても、世俗の塵埃にまみれて潔白な我が身を汚すことはしないと述べる屈原に対して、漁父は笑って傍線部のように歌って去る。「滄浪の水清まば、以て吾が纓を洗うべく、滄浪の水濁らば、以て我足を濯ぐべし」とは、政道が正しく行われておれば朝廷に仕えることができ、政道が誤っておれば官を辞して隠遁することができる、という意味である。

良経の「波に歌ひて過ぐる舟人」が意味するところは、舟人すなわち漁父が滄浪歌を歌いながら過ぎて行く、の意であると考えられる。そして、その漁父が歌う政道の正誤を説く歌を聞く良経は、清廉であったが故に放逐された屈原と重ねられている。そのように考えると、上句の「入り江の蓮」とは、『法華経』従地涌出品の「不レ染二世間法一、如二蓮華在一レ水」、またはそれを踏まえた「はちすばのにごりにしまぬこゝろもてなにかはつゆをたまとあざむく」（『古今集』夏165僧正遍昭、はちすの露をみてよめる）に見られるように、濁りの中に咲いても清く美しい

もの、すなわち清廉な人格の象徴である。清廉な人格を象徴する蓮を眼前にして、政道の清濁によって進退を決めればよいと歌う漁父の歌を聞く。それは、自らの潔白を確認するかのような情景であると考えられる。

この歌に続く634番歌も、「江」を詠んでいる。

みだれあしのつゆのたまゆら舟とめてほのみしま江にすゞむくれかな（634夏）

この634番歌は、俊頼の「ながれあしのうきことをのみゝしまえにあとゝゞむべきこゝちこそせね」（『散木奇歌集』1475）みをうらみうんをはづるざううた百す（注）から表現を摂取していることが、石川氏によって指摘されている。俊頼歌は「恨レ躬恥レ運雑歌百首」という、我が身の不遇を嘆く百首歌で詠まれたものである。本百首が建久の政変後の籠居中詠まれたものであるという背景を踏まえ、良経の歌に発想の面でも主題の面でも深く関わっていると考えられる。

この一首の表現を、俊頼歌の摂取という側面以外からも検討しよう。まず、三島江は蘆を景物として有する歌枕である。三島江の蘆に置いた露がはかなさを表すという趣向は、「みしまえのあしのうらつゆうちはらひあなかりそめのよのありさまや」（『行尊大僧正集』47）みしまえのわたりにをのこのあるが、あしの露をうちはらひつつかるをみて）に先例が見られ、この歌から影響を受けていることも考えられる。更に第二句「露のたまゆら」は、定家が建久七年（一一九六）九月十八日に詠んだ「はるよたゞつゆのたまゆらながめしてなぐさむ花のいろは移ぬ」（『拾遺愚草』1614韻歌百廿八首和歌・春）から摂取したものである。634番歌は、これらの先行和歌から影響を受けたり表現を摂取して形成されていると考えられる。

但し良経の634番歌には、これらの先行和歌のみでなく、次の漢詩句が踏まえられていると考えられる。

観レ身岸額離レ根草　論レ命江頭不レ繫舟（『和漢朗詠集』雑・無常790羅惟）

そもそも俊頼歌の、江に浮く流れ蘆に、足跡を留めない自らを重ねるという表現の背景に、この漢詩句の前半が揺曳していることが指摘されている。[25] その上で634番歌を俊頼歌と比較すると、良経は江に泊めた舟を詠み込み、漢詩句の後半部「論レ命江頭不レ繫舟」も一首に取り込んでいることが分かる。「露のたまゆら舟泊めて」とは、蘆に置く露のように束の間、舟を泊めるという意味であるが、本文の「不レ繫舟」、すなわち繋いでいない舟を和歌に翻案したものである。また、「ほのみしま江に」に「ほの見し間」が掛かっており、それが束の間の時間であることが強調されている。634番歌に詠まれた「舟」は、俊頼歌に新たに題材を付け加えただけではなく、俊頼歌が踏まえる漢詩句を、本文として更にはっきりと踏まえるために詠み込まれているのである。

しかし、俊頼歌が「憂き事をのみ」[見]「跡とどむべき心地こそせね」と直截的に嘆きを述懐しているのに対して、良経の634番歌は、表面的には心情の流露は見られない。一首の表面上の意はあくまでも、乱れ蘆に置く露のように束の間舟を泊めて、三島江で涼む夕暮れであるよ、である。しかし、『和漢朗詠集』詩句を踏まえて読むと、「乱れ蘆」が「岸額離レ根草」に、「露のたまゆら舟とめて」が「江頭不レ繫舟」に対応し、更にそれが「身」「命」に喩えられていることから、良経自身の命運の象徴となっているのである。下句では、夏の夕暮れ、三島江のほとりで涼を楽しむ詠歌主体の姿が詠まれている。しかし、詠歌主体の眼前にある風景は、詠歌主体の命運の頼りなさ・はかなさを象徴するものでもある。石川氏は俊頼の述懐歌の表現を摂取することで、良経自身の暗い現実と慨嘆を表出していると指摘している。但し俊頼歌に見られるような述懐は直截に表現せず、本文の詩句が有する無常観を叙景に寓しているのである。前歌と続けて詠む時、634番歌で詠まれた命運のはかなさとは、屈原のように政治の場を放逐され流浪する身のはかなさとして表現されていると考えられる。

なお前節で、雑歌においては直截的に表現されている心情を、四季歌では叙景に託した例があることを指摘した

が、この場合も「かくてしもきえやはてむとしらつゆのをきどころなきみをゝしむかな」（696雑）と、634番歌と同様に流離する身の嘆きを詠んだものが雑歌にある。四季歌と呼応するかのような雑歌が見られることは、四季歌における心情表現を、雑歌ではより直截表白しようとしているという側面があると考えられる。

次の歌も、俊頼摂取が指摘されている歌である。

いけのうへのひしのうきはもわかぬまでひとつにしげるにはのよもぎふ（628夏）

この歌も、俊頼の「あさりせし水のみさびにとぢられてひしのうきはにかはづなくなり」（『千載集』夏203題しらず、『散木奇歌集』278中宮御堂にて人人歌よみけるに、かはづをよめる）からの表現摂取が久保田氏・石川氏によって指摘されている。後に良経は、俊頼歌を本歌取りして「みさびえのひしのうきはにかくろへてかはづなくなりゆふだちのそら」（828夏、『千五百番歌合』夏二842四百二十二番左）を詠んでいる。この828番歌は、俊頼歌と同様に「みさび」「かはづ」を詠んでいるが、628番歌が俊頼歌から摂取しているのは俊頼歌以前に例を見ない「菱の浮き葉」という詞のみである。

628番歌は、池上の菱と区別が付かなくなるまで庭の蓬が茂った情景を詠んでいる。「庭の蓬生」という措辞は新古今時代に流行し、その多くは「ならひこしたがいつはりもまだしらでまつとせしまのにはのよもぎふ」（『新古今集』恋四1285皇太后宮大夫俊成女、千五百番哥合に）のように、恋歌において恋人が通わなくなったことを示す題材である。これは、『源氏物語』蓬生巻の光源氏詠「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を」など、物語的な「蓬」の認識が背景にある。

一方「菱」は、その実を採る様が江南弄七曲の一つ「採菱歌」に描かれ[26]、終日菱を採りながら、またはその様子を眺めながら過ごすと詠まれることが多い。実以外の部分も、「鏡中有レ浪動二菱蔓一、陌上無レ風飄二柳花一」（『千

載佳句』四時部・暮春106温庭筠）「梧楸葉暗蕭々雨、菱荇花香澹々風」（同・四時部・夏興129許渾）と詠まれ、菱は暮春から初夏にかけてのうららかな情景を表す景物である。また菱は、宮殿の池に生えるものとして漢詩文に描かれることが多い。『藝文類聚』所引の漢代劉歆「甘泉宮賦」（居所部二・宮）には、「深林蒲葦、涌水清泉。芙蓉菡萏、菱荇蘋繁。」、魏代夏侯恵「景福殿賦」（居所部二・殿）にも「周覧菱荷、流彩的皪、微秀発レ華。纖茎蔵蕤。」とある。これらの記述から、「菱」が豪華な宮殿の池を連想させる植物であったことが窺われる。「菱」は過去の九条邸の明るく華やかな情景を象徴していると解せる。

更に、『藝文類聚』所引の晋代杜恕「篤論」（草部・萍）には、「夫萍与菱之浮、相似也。菱植レ根、萍随レ波。是以下堯舜嘆二巧言乱一レ徳、仲尼悪上二紫之奪一レ朱。」と、菱と萍とは水上に生じる浮き葉という共通点はあるが、菱は水中に根差すものであり、波に随って流れる根無し草の萍よりも優れたものと意識されていた。「離騒」には「製二芰荷一以為レ衣兮　集二芙蓉一以為レ裳」とあり、これは『藝文類聚』草部下・菱にも引かれている。菱は蓮と並んで清らかで高潔なものの象徴であった。

それを踏まえると、「ヨモギ」が凡俗な人間や品性の象徴として漢詩文に表れることにも注目される。『楚辞』離騒で「艾（ヨモギ）」は、「戸服レ艾以盈レ要兮　謂二幽蘭其不一レ可レ佩」「何昔日之芳草兮　今直為二此蕭艾一也」と、高潔な人格の象徴である「蘭」「芳草」と対比され、凡俗な人間を象徴している。このように「蘭」と対照して用いられることが多く、「香茎与臭葉、日夜俱長大。鋤レ艾恐レ傷レ蘭、漑レ蘭恐レ滋レ艾。」（『白氏文集』巻一「問レ友詩」）、「若然則、曲阜尼丘、比二培塿一而無レ別、紫蘭紅蕙、渾二蕭艾一而不レ分」（『本朝文粋』巻十二論・都良香「弁二薫蕕一論」）など、唐詩・日本漢詩にも頻繁に見られる。

池の「菱の浮き葉」と区別が付かなくなるまで「庭の蓬生」が茂ったという情景は、時流から見放された良経の

邸宅が荒れ果ててゆくことを表している。またそれとともに、優れた清廉が、凡俗によって浸食されてゆくことを象徴する情景とも解することができる。

『源氏物語』や俊頼の表現を摂取しながら、漢詩文を取ることで、良経の状況や心情の表現がより具体的に深くなっているということができる。漢詩文摂取によって、良経は四季歌の中で季節にふさわしい叙景表現と政治批判を両立しているのである。本百首に見られる政治批判は、政変と九条家の失脚、籠居をめぐるものが中心である。しかし数は少ないが、個人的な事情にとどまらない政治性のある歌も見出せる。

このごろのをのゝさと人いとまなみすみやくけぶりやまにたなびく（676冬）

この歌は炭焼きをを詠んだ歌で、「いとまなみ」と絶え間なく炭を焼く様子が詠まれている。これは、「このごろ」では絶え間なく炭を焼いているということであり、『白氏文集』巻四「売炭翁」を踏まえたものではないかと考えられる。「売炭翁」は、「売炭翁売炭翁、伐レ薪焼レ炭南山。満レ面塵灰烟火色、両鬢蒼々十指黒。売レ炭得レ銭何所レ営、身上衣裳口中食。可レ憐衣正単、心憂二炭賤一願二天寒一。」と、炭が廉価であるために、いくら働いても稼ぎは微々たるものであるにも関わらず、炭を車に積んで売りに行くと、宮使に駆って行かれてしまうという、民衆の生活苦と官吏の横暴を描いた諷諭詩である。676番歌は、絶え間なく働き続けなくてはならない炭焼きの生活苦を、叙景に託して詠んでいると解せるのである。この歌は、民の生活にまで目を及ぼせ、自居易的な諷諭を試みていると考えられる。このような歌が見られることに、本百首が個人的な憂憤を述べるだけではなく、政治家として、兼済の意識を持って和歌を詠んでいることが顕れているのである。

結びに

本百首以前、建久年間の良経は、隠逸に憧れ、閑適生活を和歌に表現した。西行摂取に見られる隠遁志向[27]、官人生活と信仰生活の文人的な両立[28]、それらは良経の詠作の特徴ではあるが、良経だけではなく、中世の歌人に普く共有された志向でもあった。順調に政治家として歩んでいた折には憧れの対象であった隠棲生活が現実のものになった時、それは良経にとって挫折としか呼べないものであった。政治の場を捨てたのではなく、放逐された、すなわち自らが望まない状況の下で通親によって追いやられた状況であったのである。

そもそも「士」に対する「隠」とは、俗世を離れ、隠遁生活を楽しむ立場から表現するのが基本的な姿勢である。漢詩においても、白居易が隠逸生活を詠んだ閑適詩は、「士」を離れて個人的な安逸を楽しむ「独善」の表現である。しかし本百首における隠逸生活は、白居易の「閑適」とは異なり、安逸として表現されていない。良経は、「隠士」と称し閑居に住まう視点から和歌を詠じているが、そこに表れた良経の心情は、自らを閉め出した政治に憤り批判するという、あくまでも政治家のもの、九条家の一員としてのものであり、隠者とは相反する性質のものである。

本百首は、「西洞隠士」つまり山中の洞に住まう隠士が詠んだ百首歌と題されている。良経が本百首と同様に隠名を付した百首に、「南海漁夫百首」がある。「漁夫」とは漢詩文において、漁業に従事する卑賤の民でありながら、国家の制度や制約から自由な隠逸者でもあった[29]。「南海漁夫百首」で良経が「漁夫」を称したのは、漁夫の象徴する自由な隠逸者に我が身を装えるポーズを示したのであろう。しかし実際に「南海漁夫百首」に詠出されているのは、たとえそこから逃れたいという厭世志向を示しているとしても、政治家として、摂関家の一員としての立場で

あり心情である。[30]「漁父」という隠名と百首歌に表出する立場は一致しない。本百首において、良経が政治の場から離れた「隠士」を称しているのは、あくまでもポーズであり、隠名がすなわち本百首の隠逸志向を示していると直ちに結びつけることはできない。閑居に住まう視点から詠んでいるという点からは隠逸を志向しているが、政治の中枢へと視線が向けられている点で隠者ではないという、相反する立場の視線が存しているのである。

このように隠棲に身を置きながら自らの悲憤を陳べるという先行作品には、兼明親王の「兎裘賦」がある。先述のように、兼明親王は兼通によって左大臣の任から外され、西山に隠棲することになった怒りを「兎裘賦」に表した。兼明親王も、「池亭記」を著すなど、元来隠逸志向を有していたが、讒のために直面した隠棲の中では、諦観するのではなく憂憤を陳べたのである。[31]良経が漁父の滄浪歌を聞く屈原に自らを重ねたのと同様に、兼明親王も「霊均之五顧也、繞二沅湘一而傷レ楚」の章句に表れているように、屈原の境遇に自らを重ねていた。屈原は楚の王族であり、優れた政治家であるとともに文学的才能にも秀でていた。王の信任を得たものの、靳尚らの讒言にあって疎外され、更に襄王の代になってから再び讒にあって追放された。自らの罪ではなく、讒臣によって政治の場を追われて隠棲生活を送るものの、政治家の立場を放擲せず、隠棲の中から、濁世への憤りや讒臣と失政に対する批判を陳べる、『楚辞』に収められた屈原作（伝承も含む）の詩や兼明親王「兎裘賦」の系譜に、本百首も立っていると考えられるのである。なお慈円も「四季雑各二十首都合百首」で「今はただから国人に身をなさむすつる命は心ならねば」（『拾玉集』3055雑）と屈原に自らを重ねた歌を詠んでおり、建久の政変によって政治から遠ざけられた自身を屈原に重ねるのは、良経・慈円に共通している姿勢といえる。

和歌において、政治批判は本来ほとんど見られないものである。文学によって政治を批判し、政治に関わってゆく機能は、和歌ではなく漢詩に託されていたからである。本百首は和歌に政治批判、それも観念的なものではなく、

自らを陥れた通親に向けられた具体的な批判が和歌に表出した例として、注目すべきものであろう。百首の中には、676番歌のように白居易「売炭翁」を踏まえて諷諭を試みた詠も見られる。但し、自身を籠居の状態に置いた通親及び宮中政治に対する批判が中心をなしているのが、本百首の政治性の特徴であろう。

良経は本百首において、比興・諷諭の技法を用いて政治批判を行った和歌を詠もうとしている。それが建久の政変による現実的な籠居生活を背景とした心情表現であるのは無論である。しかし、政治家として、和漢兼作歌人として、良経が和歌に漢詩の機能を担わせ漢詩の表現技法を用いていることは、歌人良経の試みとしても位置付ける必要があろう。良経はその後、『千五百番歌合』では判詞を七言二句の形で付け、『元久詩歌合』の事実的な立案者ともなった。本百首とほぼ同時期に編まれたのが、漢詩句と和歌を歌合形式で番える『三十六番相撲立詩歌合』であることを顧みると、和歌と漢詩という異なる形態の文学を融合しようとする良経の模索の一端を、本百首にも見るべきであると考えられる。

【注】

（1）久保田淳『新古今歌人の研究』（昭和四十八年、東京大学出版会）第三篇第二章第三節「南北百番歌合と治承題百首」

（2）寺田純子「建久末年の藤原良経―その述懐歌をめぐって―」（『古典和歌論集―万葉から新古今へ―』昭和五十九年、笠間書院 所収）

（3）青木賢豪『藤原良経全歌集とその研究』（昭和五十一年、笠間書院）研究編

（4）片山享「建久期における藤原良経の述懐歌」（『私学研修』第96号、昭和五十九年七月）

（5）石川一『慈円和歌論考』（平成十年、笠間書院）Ⅱ第二章第六節「良経及び慈円の失意表現―『源氏物語』・俊頼などの受容を中心に―」。本稿では特に注しない限り、石川氏の論はこの論文による。なお、石川氏には関連論文として「慈円

『四季雑各廿首都合百首』考」（『中世文学研究』第17号、平成三年八月）があり、こちらも参考にしている。

（6）岡部寛子「建久末年における藤原良経―『西洞隠士百首』雑歌について『詠百首和歌』との比較における考察―」（『富山商船高等専門学校研究集録』第29号、平成八年七月）

（7）内野静香「良経『治承題百首』『西洞隠士百首』考―九条家失脚を軸として―」（『日本研究』第13号、平成十一年十一月）

（8）久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕辞典』（平成十一年、角川書店）「窓」の項（本間洋一氏担当）。

（9）三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』（平成十一年、和泉書院）第一部Ⅱ「聴雨考」、本間洋一「王朝和歌の表現と漢詩文について」（『王朝漢詩表現論考』平成十五年、和泉書院 所収）、藤川功和「定家と『暗雨打窓声』―日記において和歌において―」（『国文学攷』第166号、平成十二年六月）に詳しい。

（10）注（9）三木氏論文に詳しい。

（11）赤井益久「白詩風景小考―『竹窓』と『小池』を中心として―」（『国学院雑誌』第97巻第1号、平成八年一月）

（12）定家には〝窓の月〟を閨怨的に詠んだ「わがしたふ人はとひこずまどごしに月さしいりて秋風ぞ吹」（『拾遺愚草員外』438）文集百首・秋・残影灯閉レ墻、斜光月穿レ牆）の例がある。これは、「窓超尓　月臨照而　足檜乃　下風吹夜者　公乎之其念」（『万葉集』巻十一2679）を本歌取りしたものであるためであり、例外的である。この歌は、本間洋一氏（注（8）項目）が「皎皎窓中月、照二我室南端一」（『文選』巻二三・潘岳「悼亡詩」）や「秋風入二窗裏一、羅帳起飄飄、仰レ頭看二明月一、寄レ情千里光」（『玉台新詠』巻十・近代呉歌・鮑令暉「秋歌」）などの六朝詩の表現に基づいていると指摘しており、恋歌であると解せる。しかし平安時代以後の「窓の月」は、本論中に挙げた和歌以外の例にも、慶滋保胤「池亭記」（『本朝文粋』巻一二・記）の「秋有二西窓之月一、可二以披一レ書」や、『方丈記』の日野山の方丈庵に長明が独り居る時を描写した記述に、「若夜シヅカナレバ、窓ノ月ニ故人ヲシノビ、猿ノ声ニ袖ヲウルホス」とあるように、池亭や方丈庵など、草庵において眺めるものとして描かれている。

（13）小田剛「式子内親王歌の漢語的側面―『窓』『静（〜）』―」（藤岡忠美編『古今和歌集連環』平成元年、和泉書院 所収）

（14）日向進『窓のはなし』（平成元年、鹿島出版会）

（15）山田幸一『日本壁のはなし』（昭和六十年、鹿島出版会）

（16）アサヒ写真ブック98『窓の歴史』（昭和三十四年、朝日新聞社）

（17）後世の例であるが、『七十一番職人歌合』に「でんがくのちゆうもむぐちのすきれんじのぞくぞ月のほそめなりける」

(197五十番・田楽・左勝）がある。

(18) 川平ひとし「軒に夢みる―中世和歌における〈視点〉―」（『国学院雑誌』第92巻第1号、平成三年一月）、中川博夫「京極派和歌の一面覚書―〈軒〉をとおして―」（『徳島大学国語国文学』第5号、平成四年三月）、稲田利徳「『軒端の山』考―中世和歌の隠遁的措辞の形成―」（『国語国文』第69巻第8号、平成十二年八月）参照。

(19) 岩松研吉郎「窓の周辺―京極派歌風の一面―」（『芸文研究』第46号、昭和五十九年十二月）

(20) 注（18）川平氏論文

(21) 「壁」が隠遁的素材であることについては、谷山茂「壁の表情―万葉から現代までの身辺雑詠の一素材―」（谷山茂著作集六『平家の歌人たち』昭和五十九年、角川書店 所収）、阿尾あすか「『壁に消えゆく』考―京極派詠歌表現の一展開―」（『国語国文』第72巻第10号、平成十五年十月）に詳しい。

(22) 赤羽淑『定家の歌一首』（昭和五十一年、桜楓社）「述懐」

(23) 和歌文学会例会（平成十五年七月十九日於東京大学）における口頭発表、趙力偉「俊成の植物比喩表現とその方法―歌ことば「藤袴」と「蘭」とを中心に―」による。

(24) 都留春雄『『浮雲蔽白日』について」（『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』昭和四十九年、入矢教授小川教授退休記念会 所収）は、「浮雲蔽白日」が夫を思う妻であることを表現する他の例が見られないことから、当該詩も讒臣と人君を詠んだものとする古注に従うべきであると論じている。各解釈については、新間一美『平安朝文学と漢詩文』（平成十五年、和泉書院）第三部Ⅲ「須磨の光源氏と漢詩文―浮雲、日月を蔽ふ―」に詳しい。

(25) 木下華子・君嶋亜紀・五月女肇志・平野多恵・吉野朋美共著『俊頼述懐百首評釈』（平成十五年、風間書房）

(26) 山口爲廣『『採菱歌』について」（国学院大学漢文学会『漢文学会々報』第29号、昭和五十九年二月）参照。

(27) 伊東成師「藤原良経の本歌取りについて」（『学習院大学国語国文学会誌』昭和五十五年三月）、稲田利徳「西行と良経」（『中世文学研究』第13号、昭和六十二年八月）、君嶋亜紀「藤原良経『花月百首』考―西行摂取をめぐって―」（『風土と文化』第4号、平成十五年三月）

(28) 谷知子「藤原良経の隠遁志向について」（『国語と国文学』第68巻第6号、平成三年六月）

(29) 後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ―唐詩を読むために』（平成十二年、東方書店）「漁翁・漁夫」（安藤信廣担当）

(30) 注（2）寺田氏論文、注（4）片山氏論文、谷知子「藤原良経の『治承題百首』『南海漁夫百首』について」（『国語と国

文学』第65巻8号、昭和六十三年八月）、岡部寛子「建久末年における藤原良経―『南海漁夫百首』述懐歌について―『北山樵客百首』との比較における考察―」（『富山商船高等専門学校研究集録』第27号、平成六年三月）、内野静香「良経『南海漁夫百首』考―述懐性の分析を中心に」（『広島女子大国文』第15号、平成十年九月）によって、「南海漁夫百首」に良経の政治家としての意識が表れていることが論じられている。なお、注（2）寺田氏論文は、「南海漁夫百首」を建久の政変以後の成立と論じているが、石川泰水「『南北百番歌合』成立過程考」（『国語と国文学』第60巻第11号、昭和五十八年十一月）、注（5）石川一氏著書第二章第四節「『南海漁夫北山樵客百番歌合』成立考―拾玉集伝本を踏まえて」以来、跋文にある建久五年（一一九四）八月に一次本が成立、その後、政変後に差し替えが行われて建久六年三月以降に最終稿が成立したと考えられており、「南海漁夫百首」は政変以前の詠作と位置付けられる。

(31) 大曽根章介「『莵裘賦』小論―『鵬鳥賦』との比較考察―」（『大曽根章介 日本漢文学論集 第二巻』平成十年、汲古書院所収）

和歌本文の引用および歌番号（万葉集を除く）は、特に記さない限り『新編国歌大観』による。『秋篠月清集』…天理図書館善本叢書第38巻『秋篠月清集』（昭和五十二年、八木書店）、『拾玉集』…『校本拾玉集』（昭和四十六年、吉川弘文館）、『拾遺愚草』『拾遺愚草員外』…冷泉家時雨亭叢書第8・9巻（平成五・七年、朝日新聞社）、『長秋詠藻』…同第28巻『中世私家集四』（平成十二年、同）、『散木奇歌集』…同第24巻『散木奇歌集』（平成五年、同）『新古今集』…同第5巻『新古今和歌集文永本』（平成十二年、同）、『山家集』…寺澤行忠編『山家集の校本と研究』（平成五年、笠間書院）所収陽明文庫本、『万葉集』…『西本願寺本萬葉集』（平成五年、主婦の友社・おうふう）、『古今集』…久曽神昇編『古今和歌集成立論 資料編下』（昭和三十五年、風間書房）所収俊成建久本、『慈鎮和尚御自歌合』…細川家永青文庫叢刊第8巻『歌合集』（昭和五十九年、汲古書院）、『和漢朗詠集』…『鎌倉 墨流本和漢朗詠集』（昭和五十三年、二玄社）、『新撰朗詠集』…『鎌倉 新撰朗詠集』（昭和五十九年、二玄社）、『千載佳句』…『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書』文学篇第21巻〈漢詩文〉（平成十三年、臨川書店）、『本朝文粋』『方丈記』『源氏物語』…新日本古典文学大系、『倭名類聚抄』…『諸本集成倭名類聚抄〔本文編〕』（昭和四十三年、臨川書店）所収高山寺本、『藝文類聚』…上海古籍出版社、『白氏文集』…金沢文庫旧蔵本、欠巻は那波道円本で補う、『文選』…芸文印書館

（京都大学大学院文学研究科研修員）